

近松淨瑠璃集

中

昭和五年八月十日 印刷
昭和五年八月十三日 發行

有朋堂文庫
近松淨瑠璃集中卷
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

印刷者兼
發行者

東京市神田區錦町一丁目十九番地
三浦捷一

印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地
有朋堂印刷所

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
有朋堂書店

不許複製

緒言

上卷に續きて本書收むる所十六種、其登場年代及び作者の年齢等を示せば次の如し。

傾城反魂香	寶永二年八月十五日	五十三歳
心中二枚繪草紙	同三年三月廿七日	五十四歳
碁盤太平記	同三年六月朔日	同
戀八卦柱曆	同三年九月廿一日	同
堀江川波鼓	同四年二月十五日	五十五歳
緋縮緬卯月の紅葉	同四年四月廿一日	同
卯月潤色	同四年六月朔日	同

丹波與作	同四年六月廿四日	同
心中萬年草	同五年四月十六日	五十六歲
五十年忌歌念佛	同六年正月二日	五十七歲
今宮心中	同七年正月廿三日	五十八歲
心中刃は氷の朔日	同七年六月十六日	同
夕霧阿波鳴渡	同七年七月廿四日	同
冥途の飛脚	正徳元年三月五日	五十九歲
吉野都女楠	同年九月十日	同
孕常盤	同三年七月十六日	六十一歲

此中傾城反魂香碁盤太平記、吉野都女楠、孕常盤の四傑作を除く外、悉く世

話物にして、作者老熟の筆よく當時の世態人情を曲盡せし世話物廿四編中、實にその半を占めたり。

校訂は既に上卷に陳べたる如く、一々原本に従ひ、其面目を保存する事を努め、假名の多くして煩はしき所にのみ、近松慣用の漢字を擇びて多く填めたれば、從來の覆刻本に比して、體裁大に異なるものあり。左にその用字形式等の一斑を掲げて參考に供せん。

一、牢人(浪人の事)、十面(澁面)、腰本(腰元)、見廻(見舞)、御共(御供)、念比(懇
切(劔)、囉ふて(貰うて)の類。又人名にも、高氏(足利尊氏)、秀平、忠平(藤
原秀衡、同忠衡)の如く、故らに換へたるらしき所あり。甚しきは夫をツマ
と讀むに當り、妻字を宛てゝ實の妻と混するが如き所もあれど、其等は

一々頭註にことわり置きたれば、聊か紛るゝ事なし。

二、見へて、聞へて、心へての如く、也行、阿行を波行に混用したる例多かる外、
「壹人おばお藤と呼だ」「虫籠をはづひて」「負ほて」「とおらぬ」「破軍が
な。お。つ。た」「珍らしる。」「恨めしる。」「榮ゑて」「をのれ」「こ。ふ。せ。ふ。」「そ。ふ。
して」の如き異例も多々あり。

又、「ぬつほり」「一へん」「かつはと」の如く、半濁音符を省略するは原本の常
なれども、是には讀過の便宜を圖りて、特に「〇」符を加ふる事となしぬ。

三、原本「なり」又は「なる」と讀む場合に成の字、「あり、ある」の時には有の字、「と
も、ども」には共の字、「つき、つく、つけ」は付の字を當つる事通例なり。

又、「まで」は迄の字、「ばかり」は必ず斗の字(本書計の字に改む)、「申し、申

す」の場合は、何れも送假名を添へずして、單に申の字のみを當つる等、殆ど一定の形式となりたり。

原文の體裁斯の如し。其他漢字に振假名なくして二様に讀まると所などは、態と假名を省けり。

本書の覆刻に用ひたる原本左の如し。

傾城反魂香(八行本)

心中萬年草(八行本)

夕霧阿波鳴渡(八行本)

卯月潤色(八行本)

孕常

盤(十行本、最後一枚十一行)

碁盤太平記(八行本)

戀八卦柱曆(七行本)

ひぢりめん卯月の紅葉(八行本)

丹波與作(七行本)

冥途の飛脚(七行本)

吉野都女楠(八行本)

以上凡て丸本

心中二枚繪草紙(八行本)

堀江川波鼓(八行本)

今宮心中(八行本)

五十年忌歌念佛(八行本)

心中刃は氷の朔日(八行本)

以上凡て嚴密なる寫本

以上の諸書中、碁盤太平記以下十一編は悉く高野斑山氏の珍藏に係る。余が本書を校訂するに當り、筐底の祕を擧げて之を貸與せられたるは、深く感佩して措く能はざる所、特に記して感謝の意を表す。

大正二年七月

校註者 忠見慶造

近松淨瑠璃集 中卷 目錄

傾城反魂香 一—六〇

上之卷 一—一

中之卷 一—二五

三熊野かげろふ姿 一—四八

下之卷 一—五六

心中二枚繪草紙 六二—八四

上之卷 一—六一

中之卷 一—六八

下之卷 一—七六

血死期の道行 一—八一

兼好法師あとおひ碁盤太平記 八五—一二〇

目 錄

附たり師直がさよ衣今に一樣の

黒羽織井に大勝四十七目のいし 一—八五

おさん兵衛戀八卦柱曆大經師昔曆 二二—一四六

中之卷 一—一二五

下之卷 一—一三七

道行乗合鞍 一—一四四

堀江川波鼓 一四九—一七六

上之卷 一—一四九

中之卷 一—一六〇

下之卷 一—一六九

與兵衛おかめひぢりめん卯月の紅葉 一七—二〇〇

廿二社巡り 一—一七七

中之卷 一—一八七

末期の道行……………一九六

あとおうづき
ひ心中卯月の潤色……………二〇一—二二三

上卷……………二〇一

末期の道行……………二〇一

中之卷……………二〇五

下之卷……………二一八

助給書置……………二一八

丹波興作……………二三—二六三

上之卷……………二二三

道中雙六……………二二七

中之卷……………二三四

下之卷……………二五四

興作小まん夢路の駒……………二五四

興作おどり……………二六一

女人堂しんぢうまんねんぐさ
高野山心中萬年草……………二六三—二九〇

上之卷……………二六三

中之卷……………二七三

下之卷……………二八四

おなつごじふねんきうたねんぶつ
清重郎五十年忌歌念佛……………二九一—三三〇

上之卷……………二九一

中之卷……………二九七

下之卷……………三一〇

お夏笠物狂……………三一〇

二郎兵衛いまみやしんぢう
おきさ今宮心中……………三二—三五〇

中之卷……………三三一

下之卷……………三四五

二郎兵衛おきさ道行……………三四五

心中刃は氷の朔日

三五二——三八四

上之卷……………三五一

中之卷……………三六五

平兵衛小かん夜ルのあさがほ……………三七九

夕霧阿波鳴渡

三八五——四一四

上之卷……………三八五

中之卷……………三九五

下之卷……………四〇七

あひの山……………四〇九

忠兵衛の飛脚并三度笠

四二五——四四四

上之卷……………四一五

中之卷……………四二四

下之卷……………四三四

吉野都女楠

四四五——五〇四

第二……………四五八

第三……………四六八

第四……………四八一

天皇かちぐの御ゆき……………四八七

第五……………四九七

孕常盤

五〇五——五五六

第二……………五一九

模様盡し……………五二二

第三……………五三一

露の轡虫……………五三六

第四……………五四四

第五……………五五二

近松淨瑠璃集中卷索引……………五五七——五九四

傾城反魂香

作者 近松門左衛門

上之卷

白きを云々―能
の次第に似せて
筆を起す、下繪
の後に彩色する
意(論語)
北野―來たに掛
丹青―繪畫
きせる―被せる
と煙管
腰―越にかく
歸山―春なれば
雪解け縁にかへ
ると掛く
孫杓子―手に持
てば抱瘡輕くな
ると云ふ名物
あつき―厚きと
熟き
敦賀―鉉に掛く

白きを後と花の雪く、野山や春を畫くらん。聞に北野の時鳥、初音を啼し其昔、清涼殿に立られし、跳馬の障子の繪、夜毎に出て萩の戸の、萩を喰しも金岡が、筆のすさみの跡たへず、傳はる家や畫工の名譽、狩野四郎二郎元信、丹青の器量古今に長じ、心ばへ能男ぶり、親の繪筆の彩色に、生れつきなる美男なり。比は文龜の彌生の空、天滿天神の告有て、越前の國氣比の浦へと旅羽織、我は笠著て大小の、柄にも袋きせる筒、丁稚がこしの白山も、去年の縁にかへる山。山のいたゞき青々と、雲に映ふ月代の、湯尾峠の孫ぢやくし、盛こほしたる花重、かさねくし旅籠屋が、情もあつき燗鍋の、敦賀の濱にぞ著給ふ。四郎二郎一僕を招き、「ヤイ雅樂の介、外の弟子にも隠し、此所に下りしこと餘の義にあらず、近江、國の大名、六角左京、大夫頼賢殿と申は、佐々木源氏の旗頭高

跡なく云々―武隈の松は此度跡もなし千歳をへてや我は來にけん(能因法師)

所の者の云々―此邊能のワキ詞にてうつす、以下皆其言遺

實盛―越前生れにて白髪を染め職死せしより云ふ

しほ越の松―坂井郡濱阪村にあり、上もすがら嵐に波を運ばせて月を垂れたる汐越の松(西行)あそふ―鯖江の北の淺生津か松若は盗人の名

島の館やかたとて、系圖けいづ所領しよりやう並びなき大將成なるが、將軍家けの御意うけを受、本朝名木の松の繪本あつを集めらる。然るに奥州武隈あうしうたけくまの松と云名木いふは、往古いにしへのういん能因法師ほふしさへ、跡あとなくなりしと讀よみたれば名のみ残つて知る人なし。我是わがを書顯かきあらはし、譽ほまれを得させ給はれ、と天滿天神てんまんてんじんを祈いのりし所に、武隈たけくまの松を見んと思はゞ、越前國氣比えちぜんこけひの濱邊はまべに行べし、とあらたに靈夢れいむを蒙かうふれども、それは陸奥むつ爰こゝは越路こしち、何を知邊しるべに尋ぬべき。哀れ里人きんびとの來きたれかし、物問ものどん」とぞ呼るよ。里人きんびと「所の者の御用みやくとは、都人みやこびとにて有ありけに候。御尋たづね有たきとは何事にてばし御座候」云御覽らんの如く都の者、天神てんじんの教をしへに依よつて松を尋たづねる子細さいさい有。此所このところにこそ名高き松の候らめ。教をしへて給はり候へとよ」里人きんびと「是は思ひも寄らぬことを承うける物かな。此北國あきたにてお尋たづね有ふならば、越前布越前綿えちぜんぬのわた、若もしは實盛さねもりの生國なれなれば、お供やつこの奴やつこの髭あぶらにぬる、油墨あぶらなどのお尋たづねも有あるべきに、名高い松とは流石さすが優やさしき都人みやこびと。先當國まづの名木は、西行しほが鹽しほこしの松、あそふの松若まつわかが物見ものみの松、金かねが崎さきには義貞よしさだの腰掛松こしかけ、山のを山松庭やままつにわのを庭松、門には門松酒には濱松はままつ、肥こたは肥松こ、捻ねぢたは捻松ねぢ、わり松わりまつたい松ぬつほり松、我らが息子むすこに岩松長松いわまつながまつと申まを縁子みづりこも有、庄屋しやうやの名は松兵衛まつべゑ、若わかい時には相撲取すまみどり、赤松あかまつぶちわつた様やうに御座有ござありしが、今老松おいまつになられて、力ちからも元もとより下さり松、腰こしも屈かんで、ゐざり松くと所の人は呼候よび。ヤア誠

酒には云々―濱松のさざんざと離す故
名高き松―此松は六丈の松

まぶこそ云々―情夫に逢ふ事もさしひきあり

米―妓にかく、水損なしはいつも全盛を云ふぬめり―しなりと出た

はまつた―歎かれた

こなさあ―こなさん

に天神の御告と有に思ひ當つた。當所敦賀の町に名高き松の御座候。是ぞ京にも類なと、心を懸ぬ人もなき、色よき松の候が、若左様の松にては御座なく候か」元「實や往來も慕ふとは疑ひもなく、我らが尋る名木よ。急いで見せて給はれかし」里人「いつも夕暮毎には此所へ現はれ出給ひ候。ヤア―はや那へ御出候。我らはお暇給はり候べし。御逗留の間御用の事は承り候べし」元「頼み申候はん」里人「心へ申て候」高き名の松の門立ちなれて、人待ち顔の暮ならん。町は敦賀のかけ作り、まぶこそ汐のみちひなれ。誰をか知る人にせん此廓の、松と成しも親の爲、賣られ買はれて北國の、土氣の賤の里なれど、米の育ちは上田の、水損なしの大夫職、名を遠山と呼ばれしも、人に登れの戀の坂、おろし歩みの道中は、花の立木の其儘に、ぬめり出たる如くなり。雅樂の介、「是申見事な者が夫そこへ。夫々」といへば、四郎二郎「ヤアなんと、松が見へたか現れたか。寫しとめん」とふつと立ち、女郎にはたと行當り 元「是は扱、松かと思ふてはまつた。眞の松を尋て見ん。丁稚こい」と行違ふ、袖を控へて、大夫「是申此遠國の我々と、京の廓の松様達と、比べさんすが不覺の至り。併不粹なお方には、松と見られて嬉しうなし。杉と云はれて腹立ず。桑の木とも榎とも、こなさあに似合ふたあほふの木共見さんせ」と、

御了簡云々御
境井と同時に
實際も廣き事な
れば助力ありた
し

此身に沈む此
遊女になれる事

まざくあり
あり

無駄言なしの云ひ捨は、田舎米とて笑はれず。元ヲ、御機嫌そこねし御尤。實々松とは大
夫さま。我等はわるふ心へて、不調法な御挨拶、眞平々々お詫こと。是を御縁にお知人に
成ましたし。下拙ことは、狩野、四郎二郎元信と申わづかの繪書。去御方より武隈の松の
圖を仕れとの仰、則天滿天神の夢想に任せ、此所にて名有松と尋しを、大夫さまとの
取ちがへ、是はかふも有ふこと。御了簡ついでにお交際もあまた也。願のかなふ便もあら
ば、御世話頼み奉る」と、思ひ入てぞ語らる。女郎はつと顔を詠め、扱は狩野、四
郎二郎元信様とは御身の上か。耻をつゝむも時による。何を隠さんわしことは、土佐、
將監光信が娘なるが、父は一とせ勅勘うけ。今浪人の憂渡世、此身に沈むは申さず共、
推して泣ひて下さんせ。扱武隈の松の圖は、土佐の家の祕傳の繪本、漏すことは叶はね
共、夕不思議や天神様の夢の告、狩野と云ふ繪師下るべし。武隈の松を傳受せよ。父が
出世の種ならん、と見たはまざく正夢」と、語りもあへぬに四郎二郎、感心感涙肝に
そみ、天を禮し地を拜し、懷中の繪筆繪絹をひろけ、「サア遊ばせ御傳授頼む」と悦びけ
る。大夫「いかにも傳へ申さんが、親の免しもなき中に、筆取ることとは如何なり。ア、何とせ
ん、實に思ひ付たり。あの御供の人の立姿を松の立木になぞらへ、笠を枝葉の笠となし、